

# 田舎暮らしを楽しむ

(23)

佐藤 彰啓



新住民も加わって開いた地区集会所の落成式

ある村でのこと。集落からやや離れた林の中に一軒の家が建った。「一ヶ月にもなるのに誰が住んでいるか分からない」と地区の区長は役場に問い合わせた。都会からの移住者で、本人は住民票の転入届を役場に出せば、それで終わりと思っていたのである。役場では住民票の転入を逐一集落に報告するわけではない。農村では集落の地区が、ごみの収集から消防まで生活の重要な役割を果たしている。

集落は、江戸時代から続く地域の「自治と助け合い」

## 移住あいさつ、初めが肝心

### 近所づきあい(2)

の組織。地名でいう「大字(おおあぎ)」がその単位で、現在はこれを「区」という。都会でいう町内会である。それぞれ独自の集会施設や山林などの共有財産を持ち、行事や会費なども区により異なる。市町村は明治以降にできたもので、その集落を母体とした連合体といえる。田舎に移り住んで、役場で集落のことについて尋ねても「それは区で聞いてくれ」といわれるのがオチである。冒頭の都会からの移住者

は、こうした事情を知らなかったのである。

ではどのようなタイミングで地区へのあいさつをすればいいのか。横浜市から南房総に移り住んだ水田良一さん(61)の場合、三年前に土地を購入した時点で、隣地の所有者に「いずれ家を建てて越してきます」と茶菓子を持参した。昨年、住宅が完成したときは、向こう三軒両隣にタオルを持ってあいさつに行った。さらに組長(区の小単位の班長)を通して区長を紹介してもらった。今春、区の総会で紹介すると言われ、酒二升を提げて出席。これは、この地域のしきたりだという。酔いが回るにつれ、水田さんは地元の人々の温かさにほっとした。

これまでこの地域で多くの都会の人を迎え入れてきた渡邊昌次さん(35)は、「お祭りや共同作業は、どこも高齢化で人手不足だから、協力者は大歓迎。最初だけ警戒する地元の人々も、区へのあいさつさえ済ませれば、肩書のない人間らしいおつきあいが生まれる」と語る。